

平成 26 年度学校協議会

<協議会委員> (敬称略)

- ・古郷 幹彦 (大阪大学大学院歯学研究科教授)
- ・森田 英嗣 (大阪教育大学教育学部教授)
- ・高尾 千秋 (神戸大学発達科学部助教)
- ・竹村 伍郎 (NPO 法人 まち・すまいづくり本部 地域情報誌「うえまち」編集局長)
- ・永安 卓 (大阪市立高津中学校 校長)
- ・五十嵐 一嘉 (本校 前 PTA 会長)
- ・徳山 豪 (本校 PTA 会長)

／平成 26 年度 第 1 回学校協議会議事録

○日 時：平成 26 年 7 月 18 日 (金) 17 時～18 時 30 分

○場 所：大阪府立高津高校 校長室

○主な協議テーマ

1. 平成 26 年度学校経営計画及び学校評価等について
2. 大阪府進学指導特色校 (Global Leaders High School) 評価審議会について
3. 本校の特色ある教育活動 (特に、今年度新規の取組み) について

○出席者 (敬称略、委員は 50 音順)

会長 古郷 幹彦 (大阪大学大学院歯学研究科教授)
委員 高尾 千秋 (神戸大学発達科学部非常勤講師)
竹村 伍郎 (地域情報誌「うえまち」編集局長)
徳山 豪 (本校前 P T A 会長)
中川 哲也 (本校 P T A 会長)
森田 秀嗣 (大阪教育大学教育学部教授)
校長 村田 徹

○事務局

河合 良樹 (教頭) 西脇 富生 (事務長) 伊勢田佳典 (首席) 野口 隆子 (首席・3 年学

年主任)

田中 良幸 (2年学年主任) 前田 美穂 (1年学年主任) 小谷 智彦 (企画広報部長) 菅康之 (企画広報部)

【会議概要】

1. 校長挨拶

2. 説明主旨

①平成 26 年度学校経営計画及び学校評価等について

今年度からの新たな取組みとして、生徒一人ひとりの進路実現を一層支援できるよう、より明確な3年間の「学びの道標」を示すことを目的として、本校独自の「Can-do リスト」を作成する。また、英語運用能力のさらなる向上をめざして、これまでの取組みに加えて TOEFL にも積極的に取り組むことや、それぞれの取組みの成果が分かりやすくなるよう、可能な範囲で具体的な目標設定を行った。

②大阪府進学指導特色校 (Global Leaders High School) 評価審議会の概要について

7月9日(水)に開かれた標記審議会の概要についての説明。「確かな学力の向上」「高い志の育成、進路実現」などをめざす「各学校独自の取組み」については、概ね高評価を得た。「英語運用能力」「進学実績」についても、現状に甘んじることなく、さらに工夫を重ねていく。

③本校の特色ある教育活動 (特に、今年度新規の取組み) について

GLHS、SSHとして、これまでの取組みに加えて、今年度はさらに以下の企画に取り組む。

- ・SSH (スーパー・サイエンス・ハイスクール) として
マレーシア・シンガポールへのサイエンス・ツアー
- ・英語に関する宿泊行事:
ロンドン近郊での「国際交流研修」(2週間)
静岡県での「TOEFL 集中研修」(3日間)

■委員から出された主な意見等

【平成 26 年度学校経営計画及び学校評価等に関して】

○いわゆる“できる生徒”と“そうでない生徒”との差が広がる傾向が感じられる。“そうでない生徒”をいかに振り向かせるか。工夫を考えてはどうか。例えば英語と科学を融合した授業で、科学の発表を英語のスライドを使って行うなどの工夫も考えられる。

○一言で言えば、生徒の「気合い」を求めたい。学校としては、生徒たちが、学習に対するモチベーションを高めることができるような取組み、工夫を行うことが求められる。とりわけ、1学年のはじめをどのように過ごさせるかが大事だろう。

【大阪府進学指導特色校（Global Leaders High School）評価審議会に関して】

○「英語運用能力の向上」に向けて、以下の様な案が出された。

- ・ESSなどのクラブ活動の活性化
- ・帰国子女、留学生と英語で話す機会の設定
- ・民間企業（ホテルなど）と提携した、外国人向け地域ガイドボランティア

○大学でも「自己評価」を行っている。評価に拘りすぎるのもどうかと思うが、評価が高くなかった項目についても、工夫次第で改善が可能だと思う。今後の学校運営の参考にすることが大切。

○学校としての“構え”や経営・戦略をしっかりと持たなくてはいけない。学校の戦略・経営については短期的なもの、長期的なものを考えることが必要である。生徒の気質も、時代とともに変わっていく中で、まずは、短期的な戦略を考えることが大切だろう。4年後に迫っている100周年を好機ととらえ学校・同窓会・PTAなど、高津に関わる者が一丸となって取り組んでいきたい。

【本校の特色ある教育活動に関して】

○これまでの流れも踏まえ、概ね良い企画だと思う。参加した生徒だけに効果がとどまらないよう、参加した生徒が自分たちの言葉で全校生徒にフィードバックしていく機会も設けてはどうか。

○GLHS評価審議会での評価も踏まえ、注目される事業は重視され、そうでない取組みは排除される流れにならないか気になる。高津としてこれまで培ってきた「スクール・アイデンティティ（学校の特色）」の有効性を、さらに証明・発信し続けてもらいたい。

【今後の日程】（予定）

第2回 平成26年12月19日（金）午後5時

第3回 平成27年3月27日（金）午後5時

／平成26年度 第2回学校協議会議事録

○日 時：平成26年12月19日（金） 17時～18時30分

○場 所：大阪府立高津高等学校 校長室

○主な協議テーマ

1. GLHS総合評価結果等について
2. 本校の特色ある教育活動（特に、第1回学校協議会以降の取組み）について
3. 授業力・進学実績の向上について
4. 創立100周年に向けて

○出席者（敬称略、委員は50音順）

会長 古郷 幹彦（大阪大学大学院歯学研究科教授）
委員 高尾 千秋（神戸大学発達科学部非常勤講師）
竹村 伍郎（地域情報誌「うえまち」編集局長）
徳山 豪（本校前PTA会長）
森田 秀嗣（大阪教育大学教育学部教授）
校長 村田 徹

○事務局

河合 良樹（教頭）、西脇 富生（事務長）、田中 良幸（2年学年主任）、前田 美穂（1年学年主任）

小谷 智彦（企画広報部長）、小林孝徳（企画広報部）

【会議概要】

1. 校長挨拶

2. 説明趣旨

① GLHS総合評価結果等について

昨年度末、GLHS指定後、初めての卒業生を送り出し、一区切りとして総合評価が公表された。

GLHS10校全体としては、最難関大学への合格者増、他の府立高校の進学実績向上にも好影響がみられるなど、GLHS事業としては成功との評価。本校への評価はやや不本意であったものの、

平成27年度以降も現在の10校が継続してGLHSに指定されることになった。評価指標が明確になったことを受け、今後、以下の3点を大きな柱として計画的に進めていく。

a. カリキュラムの一層の充実

- b. 課題研究の拡大と充実
- c. 英語運用能力のさらなる向上 (TOEFL の積極的な導入)

② 本校の特色ある教育活動について

外部連携を積極的に図り、サイエンス及び英語に重点的に取り組んだ。

GLHS、SSHとして、生徒の卒業後も見据えた働きかけを強く意識しながら、日々の教育活動を

展開している。結果として、昨年以上に、とりわけ科学に関する表彰等を受ける生徒が増えた。

大阪府学生科学省「優秀賞」受賞、

工学フォーラム 2014 ポスターセッション部門「国立大学 53 工学系学部長会議賞」受賞

第 12 回高校生科学技術チャレンジ JSEC2014「佳作」受賞

科学の甲子園 大阪予選 9 位 など

③ 授業力・進学実績の向上について

学校経営計画で、生徒による授業評価については、学校平均として 3.2 を目標としている。全体として 3.196 (講師除く) であり、ほぼ目標を達成できた。さらに向上に努めたい。授業改善に向けては、教科内授業交流をはじめ、指導教諭を中心として行う教科の枠を超えた授業交流や研究協議、外部の意見も取り入れるための授業公開、管理職による授業見学を適宜行っており、授業力の向上に関する教員の意識も高くなっている。進学実績については、これからが山場であるが、模擬試験の結果が概ね良好なので期待を持てる。引き続き、生徒の希望進路の実現に向けて、教職員が一体となって取り組んでいきたい。

④ 創立 100 周年に向けて

100 周年 (式典行事) まで約 4 年となり、同窓会・PTA・校風クラブ・学校の 4 団体からなる実行委員会が正式に発足した。基本的なコンセプトとして、単に「100 周年のときだけ」盛り上がるのではなく、「100 周年に向けた」小さな取組みをプレ・イベントとして積み重ねていき、それらの取組みが全体として「高津らしさ」を表現するものにしようと考えていただいている。本校内でもプロジェクトチームが動き出しており、学力向上、学習環境、行事・クラブ活動等の観点から意見交換が行われている。単なる記念行事で終わるのではなく、これらの取組みを通して、高津高校に関わる多くの人たちの輪が繋がり、広がっていき、将来的には高津を縁とした「プラットホーム」が築かれていくような取組みとなっていくことを期待している。

■ 委員から出されたおもな意見

【GLHS総合評価結果等に関して】

○従前の高津は、生徒が自分たちのペースで自学自習し、教員はあくまでサポートに徹するスタイル。指標として提示されている内容は、本校のこれまでのカラーにはなじみにくい。これを要求されるのなら、捉え方や取組みを大きく変えなくてはならないだろう。

○「高津らしさ」とは何か、「高津」にあぐらをかいていないかと感じることもある。「高津らしさ」で済ませないで、計画を決めて早く動き、1つ1つ解決していくことが重要だと思う。

○高津高校として、どちらの方向へ行くのか、一つの分かれ道に差し掛かっているように感じる。他校との差は現時点ではさほど大きくない。TOEFLにしても、高津にはまだまだ伸びしろはあるように感じる。

○単に指標をクリアするのではなく、生徒の希望をふまえつつ、慎重に検討していくことが大切。

○自ら勉強するだけでは難しいかもしれない、高津の中でもばらつきがある。生徒の本音については、声に出さない子も多く、教員も気づくことが難しいだろう。習熟度別授業等、中ぐらいの規模でまとめてみてはどうか。

○効果的な広報も重要である。ホームページや学校説明会、中学校への案内を通じて発信しているが、さらに工夫してもらいたい。対象については、体験入学等にはやはり旧5学区から来る生徒が多いので、旧5学区・旧3学区など、近いところを優先すべきだと思う。

【本校の特色ある教育活動に関して】

○特別な活動ではなく、生徒の日常的な取組みが、全国的にも高い評価を受けたことは、後輩の励みにもなり、学校全体の活性化に繋がる。これからもこのような地道な取組みを続けていってもらいたい。

【授業力・進学実績の向上に関して】

○授業評価 3.196 という値は良い値であるが、授業力はやはり学校・教員として何よりの基礎となるものである。前回「Can-do リスト」という話もあったが、道標を示すことで、生徒自身が意欲的に授業に向き合うことができれば、進学実績の向上という結果もついてくる。引き続き、さらなる授業力の向上に向けて学校をあげて取り組んでもらいたい。

【創立100周年に関して】

○約4年というのは、計画を立てて進むのにちょうど良い期間。同窓会はもとより、PTA、後援会等とともに意識を合わせて進めていってもらいたい。

○（現役）生徒に対する学習環境面での支援が望ましいだろう。一方で、自習室の建設

にも金銭面の問題がつきまとう。より多くの方に賛同していただけること、また効率的な募金活動が不可欠だが、早めにしっかりとした計画を立てて実りの多い100周年を迎えられることを期待している。

○100周年というのは、やはり大きな節目であり、インパクトがある。準備をうまく進める中で、同窓会の一層の活性化や、生徒の意識改善が大きく図れる可能性もあり、100周年以降の高津高校を見据えて必要なテコ入れやチャレンジしやすい好機でもある。勇気をもって取り組んでもらいたい。

／平成26年度 第3回学校協議会議事録

○日 時：平成27年3月27日（金） 17時～18時30分

○場 所：大阪府立高津高校 校長室

○主な協議テーマ

1. 大学入試結果について
2. 学校経営計画について
3. GLHS評価について
4. 学校教育自己診断について

○出席者（敬称略、委員は50音順）

委員 高尾 千秋（神戸大学発達科学部非常勤講師）
竹村 伍郎（地域情報誌「うえまち」編集局長）
徳山 豪（本校前PTA会長）
校長 村田 徹

○事務局

河合 良樹（教頭）、西脇 富生（事務長）、望月 俊紀（進路指導部長）、
野口 隆子（首席・3年学年主任）、田中 良幸（2年学年主任）、前田 美穂（1年学年主任）
小谷 智彦（企画広報部長）、菅 康之（企画広報部）

【会議概要】

1. 校長挨拶

2. 説明主旨

①大学入試結果について

今年度のセンターテストは、全国平均が昨年より下がっている科目が多く、難化傾向であった。本校 67 期生は、理系より文系が良い結果を出した。京都大学、大阪大学、神戸大学の合格者数が 70 以上になるのは約 15 年ぶりで、公立大学の合格者数も、ここ 15 年で 2 番目。特に大阪市立大学・後期入試で普通科文系の生徒が多数合格した。これは、2 年前にもセンターテストが難化した際、本校の進学実績が下がったことを受けて、危機感を持って対応していたことや、2 年生後半のスタートダッシュ（自習室）、3 年での放課後、土曜の自習・講習や論文指導に多数の生徒が意欲的に集まったこと。また、志望校決定に向けた指導がうまくいったことなどが主な要因と考えられる。

②学校経営計画について

第 1 回学校評議会を示した学校経営計画および学校評価についての自己評価を行った。概ね設定目標はクリアできたが「教員向け自己診断」における組織的運営についての肯定率が 48%と低かったことを受け、学校としての方向性をより明確に示し、個々の教員が“個人商店”にとどまるのではなく“ブランドモール”的に、一層力を合わせて取り組んでいく体制づくりをめざす。平成 27 年度学校経営計画では「生徒向け授業アンケート」に関する目標を、前年度の“全項目の平均 3. 2 以上”から、最終的な授業効果を表す“項目 8・9 の平均 3. 2 以上”に変更した。他は、基本的に平成 26 年度を踏襲し、すべての点でさらなる向上に努める。

③GLHS 評価について

GL10 校共通の取組みである「総合的な学力の測定」に関して、英検準 1 級合格者 2 人、2 級合格者 200 人以上と目標を大きく超える結果をおさめ、文部科学大臣奨励賞を全国で唯一 2 年連続表彰された。また、コンクール・コンテストの入賞数は 9 となり、目標数の 5 を大きく上回るなど、すべての項目で目標を達成できた。来年度以降、進学実績の評価対象（共通）が、スーパーグローバルユニバーシティに指定された 13 大学への合格者数に変更されるが、本校としては、評価基準の変更も踏まえながら、引き続き生徒の進路希望の実現を第一目標に、授業力のさらなる向上、進学実績の伸長に努めるとともに、情緒的なケア・教育面にも、さらに力を注いでいきたい。

④学校教育自己診断について

生徒・保護者向けアンケートの結果は、概ね例年通りに高い評価をいただいた。中でも、今年度も「本校に来てよかった」と回答した生徒・保護者が多く、喜んでいる。一方、教職員向けアンケート結果で、学校運営について、例えばスーパーサイエンス関連事業について理科の教員以外は知らないことが多い等、情報共有が不十分であるという回答が多

かった。また、環境の項目で、特にトイレが汚いという意見が多かった。

■委員から出された主な意見等

【大学入試結果について】

○大学入試も、最終的には個人の戦いだが、集団として向き合うことで、一人では出せない力も発揮できるようになる。今年度の卒業生は、皆で学び、また遊ぶこともできたということだが、高津の良い伝統として継承してもらいたい。

○最近の生徒は、現役合格志向が強く、志望校を下げやすいと聞く。志望校を決める際に、生徒の志望をできるだけ引き上げるような指導も大切かもしれない。長い人生の中で、1・2年くらいの遠回りは、あってもよいように感じる。

【学校経営計画について】

○教職員向け自己診断における組織的運営についての肯定率が低いのは少し気になる。個々の教職員に委ねる部分もあってよいが、少なくとも7～8割は学校としての本筋があり、個々の教員の裁量は2～3割くらいが適当だろう。

○教員が連携するような仕掛けを意図的に作ることも大切だ。レクリエーション等を進んで行う組織はメンバーの連携も強い。

○中期的目標にある「講習・補習の充実」に関わって、一度に多くの生徒が入れる教室が不足しているとのことだが、地域の施設等を活用することも考えてみてはどうか。平日だけでなく土曜日でも活用できる施設はある。

【GLHS評価について】

○進学実績としての評価対象の一つが、来年度以降スーパーグローバル大学

・タイプAの13大学に変更されるということだが、大学側でも、学部再編や入試改革が検討されている。高大接続について新たな展開が予測される中、正確な情報収集と、それを踏まえた適切な指導が必要となるだろう。

○高大接続は喫緊の課題と言われており、今後、望ましい形が構築されることを期待するが、いずれにしても、生徒たちが自らの夢の実現に向けて、希望を持って学んでいく過程はとても大切である。希望進路の実現について、引き続き、全力で取り組んでもらいたい。

【学校教育自己診断について】

○生徒・保護者からの回答は、概ね好意的だったと思う。PTAとしては、この流れを受けて、ますます連携を強めていってもらいたいと考えている。PTA役員・委員だけでなく、一般の保護者の皆さんとの連携をさらに深める仕掛けを考えていきたい。

○学校と保護者が、双方向でメールをやりとりしている学校もある。また、インター

ネットを利用して、資金集め等に役に立っている事例もあるそうだ。環境・施設改善を図るために、そんな方法も考えみてもよいかもしれない。